

第5章 現在の和歌山と将来



新しい農業をめざして



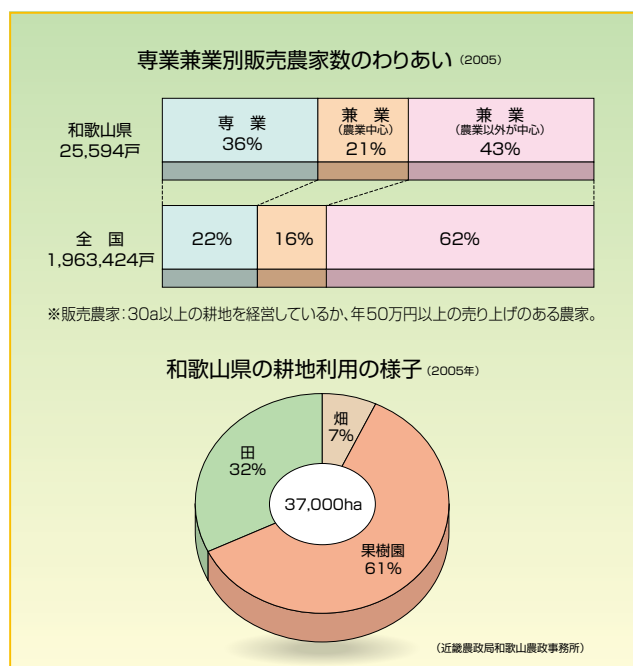
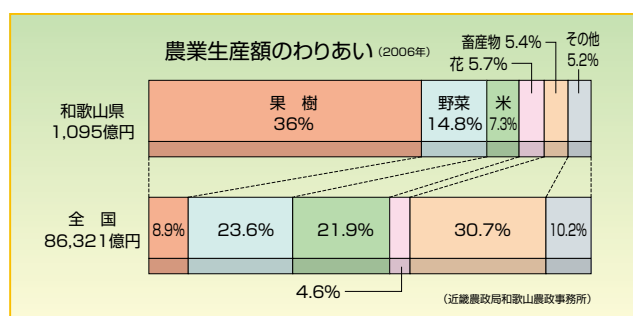
時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

農業のようす

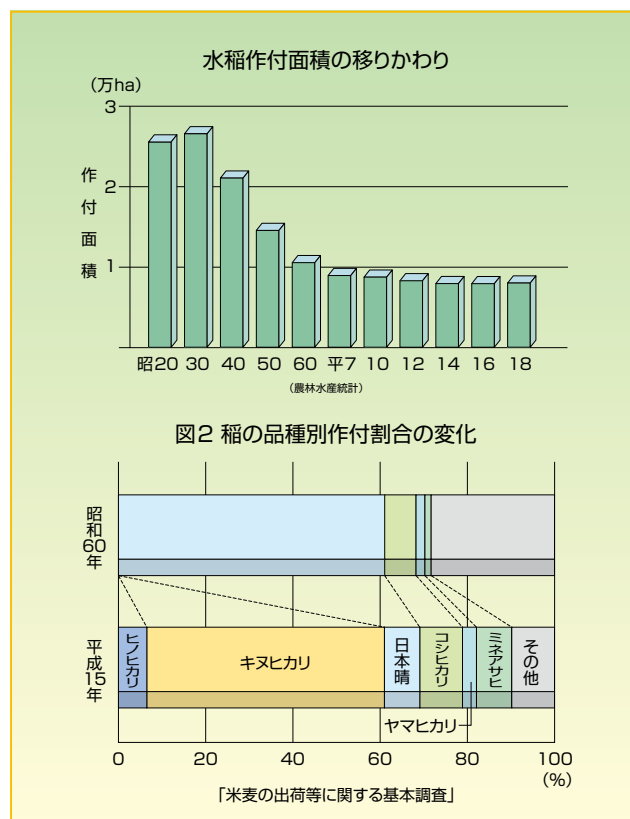
和歌山県の総農家数は36,531戸、そのうちの70%が販売農家で、その割合はどちらも全国の約1%にあたります。販売農家のうち約半数の家が農業収入で生計をたてています。農業就業者数は51,218人で県全体の約11%を占め、農業は和歌山県にとって主要な産業のひとつです。

和歌山県では果樹の生産額は農産物全体の約60%となっていて、全国果樹産額の約9%を占めています。和歌山県の農業は、大消費地である京阪神に近いという恵まれた立地条件と温暖な気象条件を活かして、果樹等の園芸作物を中心にさまざまな種類の作物を栽培しているのです。

和歌山県の耕地面積は、総面積(4,726km²)の約8%ですが、耕地面積あたりの収入をみると全国平均と比べて約2倍の収入をあげていて、土地集約型の農業が行われていることがわかります。



日本の農業は日本人の主食である米づくりが基本です。和歌山県でも第二次世界大戦後、水田によい土をいれたり、排水をよくしたり、米の品種改良や機械化をはかり増産に励みました。しかし、食生活



* 1 2005 (平成17) 年 農林業センサス。



水田から転換した畑（和歌山市）

の変化により米の消費が減るようになってきたので、もうけの多い果樹や野菜・花卉^{かき さいばい てんかん}の栽培に転換する農家が多くなっています。そのため水田の作付面積が減少し、2000（平成12）年頃からは1955（昭和30）年頃の3分の1になっています。また、品種も「日本晴」に代わり、味のよい極早生の「キヌヒカリ」や晩生^{おくて}の「ヒノヒカリ」の作付け^{かわ}に替わってきています。

果樹王国

和歌山県は耕地が少ないので、山あいの傾斜地を活かした果樹栽培が早くからさかんでした。1970年の農業政策の転換で、今まで米作りをしていた水田が少しずつ果樹園に変わり、平地にも樹園地がふえてきました。そしてそれぞれの地域の気象条件等を考えて、いろいろな種類の果樹が集約的に栽培されています。

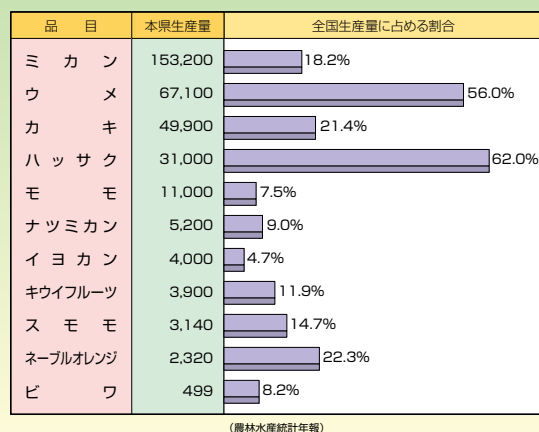
果樹の生産量をみると、ミカン・カキは全国の約2割、ウメ・ハッサクは約6割を占めています。ほかにモモ・ナツミカン・イヨカン・キウイフルーツ・スモモ・ネーブルオレンジ・ビワなども高い生産量をほこっており、県の農業産出額の約6割を果樹が占めていて、まさに果樹王国和歌山と呼ぶことができます。

将来にむけて

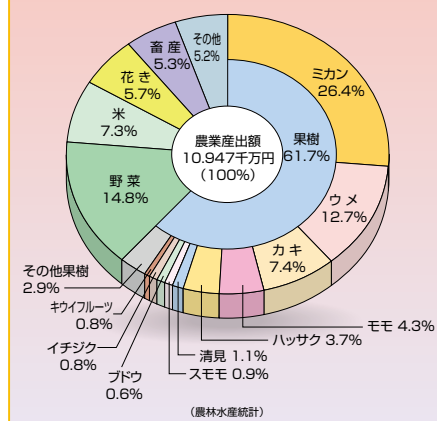
和歌山県の農業就業人口は減ってきており、そのうえ65才以上の割合が多くなって農業の担い手不足が予測されています。農業人口を確保するには、農業を続けていくための安定した収入が見込まれることが必要です。そこで和歌山県では新しく農業を始めようとする人を支援したり、農家の人が作った農作物を会社に売るように契約^{けいやく}することを手伝ったりするなどの取り組みをはじめています。また、土を使わず溶液で栽培する方法やできるだけ農薬を使わない環境^{かんきょう}にやさしい農業をするための研究も進められていて、米作りでは2006年に奨励品種^{しょうれいしゅ}として今までよりさらに品質のよい「イクヒカリ」が選ばれました。

ミカンやウメ、カキなどは栽培面積の約55%が傾斜地^{けいしや}にあり、これからは果樹園内に道路を作り、消毒や水やりの機械化などを進めて働きやすくなるようにしようとしています。また果樹は海外からの需要^{じゅうよう}も多くなり、海外への輸出による発展が期待されています。

和歌山県の果樹栽培生産量と全国に占めるわりあい（2006年）



和歌山県の農業産出額のわりあい（2006年）



* 1 実るまでの成長が大変早く、約100日で刈り取ることができる。